

五雲会

二〇一九年六月十五日(土)
開演 十二時(正午)
開場 十一時
於 宝生能楽堂

演目の解説

能「加茂」(かも)
播州「室の明神」の神職は、同一体の由緒を持つ都の「下加茂神社」にやつて来ます。そこには白木綿を廻らし、白羽の矢を立てて祭つてあり、折しも水を汲む二人の女性に行き逢い、その謂れを尋ねると、その白羽の矢こそ加茂の明神誕生の起源でした。即ち、水汲む女性の水桶に、流れて来た矢を家に持ち帰つて飾つて置くと、女性が懐妊し、その子が三歳になつた時、天に上がり別雷の神になつたのでした。二人の女性は雷神であること、を仄めかして去り、後半は御祖の神が天女の舞を舞い、別雷の神が豪快に豊穰を寿ぎます。

狂言「磁石」(じしゃく)
都へ上る田舎者が、すっぱ(悪党)に騙されて宿へ連れ込まれ、宿の亭主(実は人買)に売られそうになり、宿主(実は相談を盗み聞きした田舎者はあわてて逃げます。跡を追つてきたすっぱが太刀をぬいて威すと、田舎者は磁石の精だと名乗つて、遂にすっぱの太刀を一口に呑んでしまふと威し返し、まんまと太刀を奪うとすっぱを追ひ込みます。

能「小袖曾我」(こそぞそが)
曾我十郎祐成は、父河津三郎の仇、工藤祐経を討つ機会を狙つていましたが、頼朝の富士の巻狩があると聞き、絶好の機会と思ひ出かけることにします。母から勘当中の弟五郎時致を伴い、出陣の前に母に暇乞いをするため立ち寄りますが、時致の勘当は解けず、反つて祐成も勘当と言われてしまいます。しかし仇討ちのためと渾身の訴えをする祐成に、遂に母は時致を許し、二人は揃つて颯爽と舞を舞い、遅れてはならじと出立して行きます。

能「鶉飼」(うかい)
安房の清澄から来た二人の僧は、甲斐の国石和川にさしかかり、村人に宿を借りようとしませんが、禁制とてかなわず、先の無人の堂に泊まります。そこへ松明をかざしながら老人が現れます。老人は石和川の鶉使いで、数年前にこの老人に会つた僧がその折の事を話すと、その老人に使用が死んだ事を告げ、詳しい経緯を語り、自らその霊であると明かし申いを頼んで鶉を使う様を見せて消えて行きます。僧が申つていると閻魔王が現れ、一僧一宿の功力によつて鶉使いを助け、法華経の功德を讀んで去つて行きます。

12:00

加茂

天女今井 基
ツレ川瀬 隆士
シテ金森 隆晋

ワキ 館田 善博

ウキツレ 梅村 昌功

〃 吉田 祐一

間 高澤 祐介

大鼓 大倉栄太郎
小鼓 鳥山 直也
太鼓 大川 典良
笛 杉 信太郎

13:30

磁石

後見

辰巳満次郎
大友 順

地謡

上野 能寛
朝倉 大輔
金井 賢郎
當山 淳司

小林 晋也
水上 優
渡邊 茂人
東川 尚史

三宅 右矩
三宅 近成
金田 弘明

14:10

小袖曾我

トモ 藤井 秋雅
母 高橋 憲正
五郎 辰巳大二郎
シテ内藤 飛能

鬼王 田崎 甫
團三郎 金野 泰大

大鼓 亀井 洋佑
小鼓 古賀 裕己
笛 藤田 貴寛

後見

高橋 巨
和久荘 太郎

地謡

木谷 哲也
辰巳 和磨
佐野 弘宜
亀井 雄二

小倉健太郎
今井 泰行
藤井 雅之
小倉伸二郎

へ 休憩 十五分 へ

15:25

鶉飼

シテ澤田 宏司

ワキ 御厨 誠吾

ウキツレ 野口 琢弘

間 前田 晃一

大鼓 柿原 孝則
小鼓 住駒 充彦
太鼓 金春 國直
笛 熊本俊太郎

後見

宝生 和英
佐野 由於

地謡

上野 能寛
朝倉 大輔
金森 良充
藪 克徳

野月 秀聡
金森 光祥
東川 玄宜
佐野 玄宜

終演予定 十六時三十分頃

次回予告

二〇一九年七月二十日(土)
正午 始

来	藤	氷
殿	亀井 雄二	室 藪 克徳
朝倉 大輔		